



五木寛之討論集

箱舟の去ったあと



仁五郎 小田 実 久野 収 内村剛介
坦足穂 野坂昭如 篠山紀信 秋山 駿

講談社

箱舟の去ったあと

五木寛之
討論集

六〇〇円

著者 五木寛之

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二一二一

〒一一二 振替 東京 三九三〇

電話 東京〇三九四五一一二二（大代表）

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場



第一刷発行 昭和四十八年八月二十四日
第二刷発行 昭和四十八年十月三十日

©五木寛之 昭和四十八年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

箱舟の去ったあと 五木寛之討論集 目次

絶望的青春論

羽仁五郎

7

人間を考える

小田 実 久野 収

37

同時代について

篠山紀信

95

若者へのぼくら二人の訣別宣言

野坂昭如

125

反自然の思想

稲垣足穂

145

わが内なる吉田松陰

内村剛介

173

デラシネとしての旅

秋山 駿

211

イラストレーション
装幀構成
村山豊夫
ペン・シャーン

箱舟の去ったあと 五木寛之討論集

絕望的青春論

五木寬之

羽仁五郎

五木 羽仁さんはお酒はお飲みにならないんですか。

羽仁 飲みますよ。だが、ちゃんとした話をするときには飲まない。ぼくは酒を飲んだりタバコをプカプカふかしたりして、夜おそくまで無駄話をしたりするのは大嫌いなんだ。

五木 なるほど。

羽仁 だから学生の集まりなんかでも、まじめな話はきちんとやろうじゃないか、タバコをすうのはやめろ、という。

五木 ぼくは禁煙五年めですからタバコは平気ですが、しかし無駄話をして夜ふかしするのはやめられないな。(笑)

羽仁 あなたも新宿とか銀座のバーなどへは行くの？

五木 かなりよく行くほうですね。

羽仁 ぼくはああいうのは大嫌いなんだな。よんどころなく誘われて一度か二度行ったことがあるけど、つまらんね。だけど、いわゆるインテリというのは、みんな銀座とか、新宿あたりのバーに行くでしょう。このあいだ埴谷雄高が会のあとでぼくをそういう所に誘うんでね、「おまえまでがこんな

ことをやってるんじゃないぞ」といったんだ。(笑)

五木 しかし、バーもいろんな人がいておもしろいんじゃないですか。客だってホステスだって、実にさまざまですし、ちょっと世間の縮図みたいな感じもあるでしょう。

羽仁 あなたがそんなことをいっちゃダメだ。そんなところへ行かなくたって世間は判る。(笑) いったったか、たしか吉野源三郎だったと思うが、つまり敗戦までの日本軍隊にもいいところがあったというんだ。あそこではじめて大学を出たようなインテリが小学校もろくすっぽ出てないような民衆と直接に接し合えた。その唯一の場所としては意味があったというんだ。ぼくは軍隊には行ったことはないけど、呆れ返ってね。おれはもうこんなこと言うやつとは付き合わんと思った。あの軍隊のためにどんな悲劇が民衆の上にもたらされたかを考えてごらんさい。そういう底辺の民衆と付き合うのに軍隊へ行かなきゃならないのはだね、つまり一言でいえば、それはサムライ的な発想なんだな。

五木 なるほど。

羽仁 それは断じて町人的じゃない。

五木 羽仁さんのご先祖は町人だったのですか。

羽仁 ぼくは上州の桐生の生まれです。桐生という町は江戸時代の機織^{はたお}りの町ですから、いわゆる城下町じゃない。それで士族というのは代官屋敷の連中など、ほんの少数しかいなかった。あとはぜんぶ町人。自分が生まれた町がそうだから、ぼくはこれまで一貫して町人の立場でものを考えてきたのかもしれない。反サムライ、反官僚だな。



羽仁五郎

五木 ぼくの両親は九州の農家の出身ですから、ぼくの中に流れているのは農民の血だといっていると思うのです。ですから同じアンチ・サムライの感覚にしても、どこか微妙に食いちがった部分があるようですね。サムライ階級に対しても、いわゆる経済力や町奴まちやつこの気骨などで堂々と対峙するといった具合じゃなくて、もうちょっと陰惨になるところがある。国家権力に対してもそうです。ぼくは外国に行くとき、菊の紋章のついた政府の旅券を持たされることに腹を立てながら、一方ではその旅券を失くしたらどうしようと不安になったりするんですね。戦後、外地で国家権力から見放された難民としてウロウロしたころの恐怖心がまだ抜けきれないで残ってるんじゃないかと思うんですが。

羽仁 ぼくはそんなことはありませんよ。ぼくが戦後最初にヨーロッパに行ったときは、日本人は無国籍人なんです、扱いが。連合国に占領されている国の人間だから独立国家の人民じゃない。だから菊の御紋章のついたパスポートなんか持ってなかったんだ。したがって少し面倒な仕事をしようと思ってもできない。そういう宙ぶらりんな立場でおよそ一年ほどヨーロッパにいたんですが、非常に気持ちよかったです。かえって自由な解放感があったね。

五木 そうですか。それは町民、市民の強さかもしれないですね。しかし、ぼくらの心の奥底に、権力とかサムライ的なものに対して、否定しつつも否定しきれない妙なドロドロしたものがあつたことは確かだと思うのです。否定するのはその存在を認めざるをえないからであつて……。

羽仁 あなたが小説家としてそういうことをいわれるのには別に反対もしないけど、理論としてはまったく立たないね、それは。やはり自分にもっと厳格になったほうがいいんじゃないのかな。ちゃんとしなくちゃいけない。ぼくは子供にもいうんだ。いいかげんなことをいっちゃいかん、と。

小学生であろうと誰であろうとです。

このあいだも法政の学生の集会に行くのに東京駅からタクシーに乗って行ったら、大学の門の前で、学生がヘルメットかぶってゲバ棒もってマイクでやってた。そうしたらタクシーの運ちゃん「学生はまだこんなことやってるんですか」というから、「よけいなことをいうな」といったんだ。すると「大学の先生ですか」というんで、「関係ねえや」っていつてやったんですがね。いいかげんなことをいうのは、お互いに厳しくしたほうがいいんじゃないかな。

五木 しかし、その運転手のセリフは比較的よく耳にする言葉じゃないですか。そういう人も多いです。といってそこでビシッとたしなめるといいうのは、なかなか難しいですよ。ちよつと気の毒みたいで、勇気がいるでしょう。

羽仁 そんなことはないね。

五木 つまらないことを伺いますが、羽仁さんは、流行歌をお聞きになりますか。

羽仁 ああいうのは嫌いです。

五木 ぼくはいまお話しになったタクシーの運転手の言葉を、言下に批判できない気持ちで流行歌の精神構造だと思うんですが。

羽仁 ほう。

五木 それから国家権力に対する二重感覚もそうなんじゃないかと思ひます。

羽仁 それはちよつと独創的な見解だな。

五木 ぼくは流行歌とか歌謡曲とかいったたぐいの歌を全面的に肯定してるわけじゃないんですよ。

むしろ、どうしようもないほど貧弱で、情けない音楽だと思います。にもかかわらず、好きなんだな。やはり美空ひばりの『哀愁出船』だの、春日八郎の『別れの一本杉』だの、デビュー当時の藤圭子だのを聞いてジーンとくるものがあるのは事実なんです。しかし流行歌ってのは、どんなに明るいメロディーでも、つまるところ負け犬の歌なんですね。そして、その負の心性を頭で否定しながらも、ぼくらはそれに共鳴する部分があることを認めざるをえない。つまり愛憎二筋、批判する意識と、どこかで共鳴する心情、その両者のからみ合いの中に自分が日本人として在ると感じる。ぼくはそこに目をつぶった発想から出発する新しい日本の歌は信用できないし、好きになれません。つまり自己の借金を確認する地点からはじまる運動でなければ必ず挫折するような気がしてしかたがないのです。いわゆる進歩的教養人といわれる人たちの心の中にだって、おれはフォーレやドビュッシーの歌曲が好きだと言い、自分でそう思いこんでても、虚心に耳を傾けると流行歌に感応する負の暗部がきつとあると思うんですがね。そこに目をつぶってしまうと力のない批評にすぎないものになる。あれだけインテリが流行歌を嘲笑してきながら、現状はどうか、ということですね。自己批判としての流行歌批判ができなくては駄目だと思います。

羽仁 それは研究するに足る問題なんで、帰ってから考えてみましょう。しかし、さっきからあなたの言うことを聞いていると、あなたは日本人の大多数が国家権力に迎合する一面を心の底に持っていると思っているらしいが、それはちがうね。

五木 そうでしょうか。

羽仁 いつか岩波新書で『戦没農民の手記』というのを出して問題になったことがある。その手紙を

読むと、存外農民は戦争を本気でやってみたいんだね。だけれども、ぼくは戦争に引っぱり出された農民兵士が、手紙の中で本音を吐くはずがないと思う。戦死する兵隊が「天皇陛下万歳」と叫んで倒れるというのは嘘で、実際には「お母さん！」と叫んで死ぬんだそうだ。

五木 ぼくは「天皇陛下万歳」もやはりあると思う。ぼくは戦争教育を精神の成長期に体験した組です。すから、いまでも軍人勅諭ちよくゆの全文を空で言えますよ。大人になって憶えさせられた人たちは忘れてるでしょうがね。しかし、最も心の柔らかな少年期に叩き込まれた記憶は、三十年ちかくたってはまだ反射的にダーッと出てくるんだからいやになる。言ってみましょうか。(早口で暗誦) こういう時代の空気を呼吸して、つまりファシズムで産湯うぶゆを使って生まれた人間の中には、たとえそれが今からふり返って滑稽であろうとも、やはり本気で「天皇陛下万歳」と叫んで死のうとする青年はいたはずだと思う。それにその事があるからこそ、天皇の問題がぼくらにとって今なお現在の問題であるわけじゃありませんか。

羽仁 それはそうかもしれない。しかしだね、あなたは日本人の負の心性というが、もしも本当のインテリであれば、そういうコンプレックスはないと思うんだ。人間のもっている二義的なもの、どうでもいいようなものを取り払ってしまうためにインテレクトというものはあるんですからね。インテリゲンチヤの意味とは、生まれながらの人間性がいろいろおかしくなったやつを、また知性によって全部洗いなおして、生まれながらの人間性を回復するということでしょう。

五木 ぼくだってそうありたいとは思いますよ。しかし、どうしても吹っきれないものというのがあると思うんです。流行歌でも国家権力でも、愛憎二筋のからみあった中にあるのは事実なんですか

ら、少なくともぼくの場合は。だからといっていまの情けない流行歌に身を浸していいとは夢にも思っていないせん。そこから出発しようと言っているんです。それはまごうことなきぼくらの歌ですからね。ロックの世代の中にもそれはある。ないと見るのは樂觀的すぎるような気がしますよ。田中角栄を首相にしたのは、もちろん政治の問題でしょうけど、ぼくは日本の歌謡曲の精神だと思いますね。

羽仁 ぼくはあなたの作品を読んで、これは大したものだと驚いたんだ。凄いと。あなたについて書かれたものも読んだが、それはぜんぜん五木寛之をわかつちゃいらないと思った。しかし、さっきからあなたの言うことを聞いていると、あなたは自分の文学が表現したものが何なのか、自分でまったくわかつてないね。

五木 そうですか。(笑)

羽仁 ぜんぜんわかつていない。のみならず、あなた自身のこともわかつてないんだ。さっきからまるで聞くにたえんようなことをいう。久野収なんかの悪影響じゃないのか。

五木 これはひどいことになってきたな。そんなにわかつていませんか。(笑)

羽仁 わかつてない。しかし、ぼくにわかつてないといわれてニヤニヤ笑つるところなぞ、五木寛之というのも大した自信家だね。ちっとも気にしとらん。あなたはまさに羽仁五郎につぐ自信家だよ。

五木 いえ、それほどではありません。

羽仁 匹敵するとはいってない。ぼくに、つぐといっている。(笑)